

総合人文科学研究センター研究部門  
現代社会における「想像力」の総合的研究

### 2017年度第2回研究会の報告

日時：2017年6月30日（金）18時15分から20時45分  
会場：戸山キャンパス33号館6階、第11会議室

このたびの「想像力」研究2017年度第2回研究会は公開で開催し、部門構成員を含む15名の参加者を得た。今回は、御子柴善之（本学教授）と岡部耕典（本学教授）が話題提供を行った。岡部先生が上映してくださった映像作品が強い印象を残す研究会となった。

第1報告者の御子柴善之は、「ひとはなぜ『想像力』に期待するのか」と題し、現代社会の諸問題を解決するための処方箋として「豊かな想像力」をもつことが期待される傾向について論じた。まず、20世紀後半の倫理学において想像力が要求される場面の例を世代間倫理にとり谷本光男やヨナスの言説を紹介するとともに、ジョンソンの「道徳的想像力」論を紹介した。次に、哲学が、「想像力・構想力」を感覚と知性との中間に位置づけてきたことをアリストテレスとカントの所説に基づいて確認した。同時に、想像力に二面性を見る議論が、カントのみならず20世紀のリクールにも見られることに言及した。以上を踏まえて、ひとが想像力に期待をかける理由を、知性と感覚、あるいは（倫理学における）判定原理と執行原理との懸隔を埋めることが期待されているという点に見出した。併せて、想像力には、対象の現前が「まだない」や「もうない」という〈無〉が貼り付いていることを指摘し、そこに生じる差異が価値を創出する可能性を論じた。最後に、アンダーソンの「想像の共同体」、テイラーの「社会的想像」、スピヴァクの「文学の想像力」、モーリス＝スズキの「批判的想像力」に言及することで、今後の議論の手がかりとした。（御子柴記）

第2報告者の岡部耕典は、「相模原障害者殺傷事件と想像力」と題し、相模原でおきた障害者殺傷事件後に新聞等に掲載された文章やコメントを紹介しつつ、この事件が社会に投げかけた課題とその解決するために必要な〈想像力〉の在り方が参加者に問いかけられた。報告の後半は、岡部自身の重度知的障害／自閉の息子とパーソナルアシスタントの地域生活を描いた映像が上映され、両者の関係性やその生活の実際をめぐって、活発な質疑が展開された。（岡部先生記）

次回の研究会は、10月末までのあいだで、可能な限り多くの参加者を得られる時間を探し、開催する予定である。（報告取りまとめ：御子柴）